モニカ・ロヴィネスクの反体制運動における エリアーデ宗教学の展開

奥山　史亮

１．本稿の目的

本稿は，ルーマニア人亡命者の反体制運動において宗教学がどのように語られたのかという問題に取り組むことにより，冷戦体制下において宗教をめぐる言論がおびた政治性を明確にすることを試みる。

ロシア・東欧諸国における共産主義体制の成立と崩壊は，宗教をめぐる言論にきわめて大きな影響を及ぼした。宗教に関する言論は，その発話者と国家との関係を規定するゆえに，政治的活動に直結する行為であった。ルーマニア正教会は，共産主義時代の初代総主教であるユスティニアン・マリナ（Iustinian Marina，在任期間 1948-77 年）の主導によって共産党と協定を結び，プロパガンダや公共秩序の維持に協力することを条件に公的な活動を継続することが許された。しかし，共産党への協力を拒み，教会を離れようとした聖職者の多くは，戦前の民族主義運動であるレジオナール（鉄衛団）の思想に染まり公共秩序を乱す者とみなされ，保安警察の監視下に置かれたり，収容所に監禁されたりした。収容所では，共産党に忠誠を誓うための「再教育（reeducații）」が施され，教育の効果が表れた者は保安警察の工作員として使われる場合もあった(1)。

ルーマニアを亡命した人々は，戦後，フランスやイタリア，アメリカ，アルゼンチンなどに定住して反体制運動を展開した。とりわけパリでは，ヴィルジル・イエルンカ（Virgil Ierunca），モニカ・ロヴィネスク（Monica Lovinescu），ミルチア・エリアーデ（Mircea Eliade）などが中心となり，ルーマニア人としての民族的連帯を呼びかけ，故国で抑圧下に置かれていた宗教や哲学，文学などを国外で存続させるための運動を展開した。その反体制運動においては，還元不可能な「宗教」を主題とするエリアーデの言論は共産主義政権の文化統制，プロパガンダに抗する理念として受容された可能性が想定される。以下では，ルーマニア人亡命者の共同体で中心的役割を果たしたモニカ・ロヴィネスクの反体制運動において，エリアーデの宗教学がどのように語られたのかについて整理し，上記の問題に取り組む。

なお，論を進める前に，エリアーデに関する研究史における本稿の位置づけを述べることで，本稿の特徴を明確にしておく。エリアーデ宗教学に関する研究は，エリアーデの生前から数多く行なわれてきた。それらの研究方法は多岐にわたるが，『永遠回帰の神話』『宗教学概論』『シャ

ーマニズム』『聖と俗』『世界宗教史』などの代表的著作を分析し，それらの学説としての評価を問うものが中心であった。その後，鉄衛団関与の問題が浮上すると，ファシズムや反ユダヤ主義との親和性をエリアーデの宗教研究と文学作品から読み取ろうとする研究が多く行なわれるようになった。

このような研究動向のうちに本稿を位置づけるならば，本稿は「宗教」をめぐるエリアーデの言論がルーマニア人亡命者の共同体によってどのように受容されたのかという問題の解明に力点を置く。後述するように，第二次世界大戦後のエリアーデは，共産主義政権の文化統制からルーマニア固有の文化を防衛することを目的とした亡命者組織の活動に深くかかわり，そして，彼の言論はモニカ・ロヴィネスク等によってほかの亡命者たちに広く紹介されていた。戦後におけるエリアーデの言論は，亡命者たちによって受容されることを最初から想定して為されたものであった。それゆえに，エリアーデと亡命者組織のこのような関係性を整理することは，エリアーデ研究において不可欠な作業と言える(2)。本稿は，これまで看過されてきたエリアーデと亡命者組織の関係性を明確化するとともに，宗教の固有性に関する言論が冷戦体制下でどのような政治勢力に回収されたのかという，宗教学と政治の問題を考察するための事例を提示する役割も果たす。

２．モニカ・ロヴィネスクの反体制運動

最初に，モニカ・ロヴィネスクという人物について，彼女がたずさわった反体制運動に力点を置きながら紹介したい(3)。ロヴィネスクは，1923 年に文筆家として知られていたエウジェン・ロヴィネスク（Eugen Lovinescu）とエカテリナ・ロヴィネスク（Ecaterina Bălăcioiu-Lovinescu）の長女として生まれた。父親であるエウジェン・ロヴィネスクは大学進学前に亡くなったが，文学や戯曲に親しんでいた彼女はブカレスト大学で演劇と文学を専攻した。1946 年にブカレスト大学を卒業すると，小説家・演出家として知られていたカミル・ペトレスク（Camil Petrescu）の助手として，演劇・文学関係の刊行物の編集にたずさわっていたが，翌年フランスに留学する奨学金を得て渡仏し，そのまま亡命した。ルーマニアに残った母親は，共産党の厳しい監視下に置かれるようになり，1958 年 5 月 23 日に逮捕され，投獄された。1960 年 6 月に獄死したと報告されている(4)。

フランスにおいてロヴィネスクは，演出や翻訳の仕事にたずさわっていたが，1951 年からは亡命者向けのラジオ放送の仕事を引き受けるようになった。とりわけ 1962 年から 1992 年までの期間，自由ヨーロッパ放送でルーマニア人亡命者に向けた放送を担当した。そのラジオ放送では，国内外にいるルーマニア人の文学，哲学，芸術などを紹介するほか，社会主義政権に対する批判や体制下の人間が亡命するための支援を呼びかけた。現在，ロヴィネスクが担当した放送内容を文書化したものがフマニタス出版（Humanitas）から刊行されている（Monica Lovinescu, *Unde Scurte*, *I –VI*, Humanitas, 1990-1996）。その内容を丁寧に読み解くことは，戦後のルーマニア人亡命者組織の内実，亡命知識人たちの活動を知るうえで重要な作業となろう。本稿では，エリアーデをはじめとする数多くの亡命知識人たちがかかわった，ポール・ゴマ（Paul Goma）の解放運動に関する放送内容をみることで，ロヴィネスクの活動について紹介したい。

1977 年にチェコスロヴァキアで，ヴァーツラフ・ハヴェル，ヤン・パトチカ，ズデネク・ムリナーシらがグスターフ・フサーク体制に対して，ヘルシンキ宣言の人権条項を順守するように求める文書（Charta77）を作成し，それが西ドイツの新聞に掲載された。ルーマニアでもそれに呼応する反体制運動を起こすべきという意見が一部の知識人のあいだで生じ，その中心になったのがポール・ゴマであった。ゴマはブカレスト大学文学部の学生のときから，1956 年のハンガリー事件を風刺した小説を発表するなどして反体制的な活動を行なっていた。そのことが原因で逮捕され，Jilava と Gherla の収容所に 1963 年まで監禁された。釈放後は共産党に入党するが，言論の自由を訴える活動を継続したために保安警察の監視下に置かれ続けた。

1970 年代になると，チェウシェスクがソ連の政策に反し，中国や北朝鮮に接近するようになり，民族主義的な文化政策を推し進めるようになる。とりわけ共産党の日刊紙『閃光（Scînteia）』において(5)，毛沢東の文化大革命をモデルにした文化統制の実施が宣言されてから，文化創作に対する規制が強化された。ゴマが所属していたルーマニアの作家組合協議会（Consiliului Uniunii Scriitorilor）もプロパガンダに沿った作品を刊行することを求められた。ロヴィネスクは 1980 年に，1970 年代の文化統制の特徴について以下のように記している。

> 知識人たちを嫌悪することは共産党の風習であったとしても，その嫌悪を公にすることはほとんどなく，偽善や建前を示すことがこれまでの常であった。ルーマニア共産党の指導部は，1965 - 71 年まで，知識人たちと協力した政策を実施し，作家たちを支援しようとしていた。周知のように 1971 年 7 月になると，ルーマニアは中国から着想を得た文化小革命〔minirevoluție culturală〕を実施するようになった。その文化小革命は，〔中国のものと比較すると〕非徹底的であり，バルカン化され，現地色が強められていた。小革命に対する作家や芸術家たちの非組織的であるが真剣な反対が生じたが，結局，中国における結末のような大惨事には至らなかった。〔中略〕北京で大革命の責任者たちが共産党裁判に連行され，数万人の死者，さらに知識人世代の壊滅，文化の死滅に対する責任を追及されている現在，猛毒性のある革命が再燃する可能性などないであろう。ルーマニアでは幸いなことに，数万人の人間が殺されることはなかったが，知識人世代の壊滅，文化の死滅によって，いかなることが生じたであろうか。この破壊的政策の結果について言えば，中国の共産党政権は死に瀕していた文化を再生すること，エリートを早急につくりだすことによって新たな知識階級を得ようとした。それに対してルーマニアでは，北京で糾弾されている政策のうち，最悪の特徴が受け継がれた。すなわち，文化，知識人に対する蔑視であり，ニキータ・スタネスク〔Nichita Stănescu〕の提言によれば，知識人たちを労働に利用する事態である。(6)

中国の文化大革命との比較が妥当なものであるのかについては，改めて検討を加えなければならない。しかし，上記の引用文からは 70 年代の文化統制によって，ルーマニアの文化的営為がきわめて大きな損害を被り，衰退したとロヴィネスクが見なしていたことを確認できる。このような共産党の文化統制に意義を唱えることを計画していたゴマは，チェコスロヴァキアで憲章 77 が起草されると，反体制運動を拡大する契機とそれを見なし，憲章 77 に倣って署名を集めるこ

とを試みた。しかしルーマニアでは多くの署名が集まることなく，ゴマや賛同者に対する弾圧が行なわれることになった。ゴマはチャウシェスクに対して，以下のような公開書簡を送りつけた。

> チャウシェスクさま，絶望的な状況の中からあなたさまに申し上げます。あなたはわたしの最後の希望です。〔中略〕プラハで憲章 77 が公表されてからチェコスロヴァキアの運動と連帯するように知識人たちを説得してまいりました。しかし思うようにいきません。幾人かは，そのような連帯は刑法上のなにかに反すると真面目に述べ，はっきりと断りました。ほかの者たちは，言い訳として刑法上の事柄を持ち出すようなことはしませんでしたが，保安警察を言い訳としました。もう少し勇気のある者たちは，連帯に向けての手紙に署名すると言ってくれましたが，〔本人とわからないように〕判読不可能な署名でした。〔中略〕同胞たちの姿勢に深く傷ついたことをお察しください。隣国人たちはみな，行動をおこし，当然与えられるべきである権利を求めています。ロシア人たちでさえも，自分たちが自由でなく，自分たちの権利が踏みにじられていると大声で訴えています。われわれルーマニア人だけが沈黙し，待っているだけなのです。だれも行動しようとしないのです。ルーマニア人は保安警察に知られたときに失うものについて考えるばかりで，保安警察に抵抗することで得られるものについて考えようとしないのです。〔中略〕ルーマニア人はみな，保安警察を恐れています。ルーマニアで保安警察を恐れない人間は，ふたりだけです。すなわち，あなたとわたしです。しかし申し上げましたように，たったふたつの署名だけでは〔役に立ちません〕……。〔中略〕しかしあなたが，憲章 77 を支持するという〔わたしの手紙と〕同じ内容の手紙を書いてくださるならば，状況は一変します。数百万人のルーマニア人たちがあなたに倣ってチェコスロヴァキアと連帯するでしょう。そうすることであなたは，1968 年に宣言なさったこと〔チャウシェスクは 1968 年 8 月 15 日にプラハを訪れ，ワルシャワ条約機構の部隊がチェコスロヴァキアに侵攻したことを非難し，トゥプチェクと連帯することを確認した〕から一貫していることを示すことになるのです。本当に社会主義のために，民主主義のために戦っていらっしゃることを証明できるのです。さらに，ベオグラード会議に胸を張って参加できるようになるでしょう。(7)

このような反体制運動を展開したゴマは，身柄を拘束された。海外に亡命していたルーマニアの知識人たちは，ゴマの逮捕に関する報告を受けて彼の解放を求める運動を展開した。その運動においてロヴィネスクは，ゴマの署名活動を支持する呼びかけを行なったり，亡命者が連帯してチャウシェスク政権に抗する運動を展開するように呼びかけたりすることで中心的な役割を果たした。たとえば，ゴマの逮捕直前である 1977 年 4 月 1 日の放送では，チャウシェスク政権が，チェコスロヴァキアなどのスターリン主義との差別化を強調するために，ゴマの言論を利用していることについて報告している(8)。すなわちロヴィネスクによれば，ルーマニア政府は，外務担当者であったコルネル・ブルティカ（Cornel Burticǎ）が中心となり，ゴマの要請を受け入れるために話し合いを開始したこと，スターリン主義とは異なり反体制派に対する暴力的対処でなく反体制派との対話を重視していることを西側のメディアに向けて強調している。しかしその裏で

は，自宅への侵入や暴行，脅迫などの古典的な弾圧が実施されているという。ゴマの自宅は保安警察によって幾度も侵入され，彼は署名活動の書類を渡すように脅迫された。ゴマを支持した文筆家のイオン・ヴィアヌ（Ion Vianu）は息子まで暴行され，脅迫を受けたとロヴィネスクは報告している。

同年 4 月 12 日には，ゴマ逮捕のニュースが流された。それに対してロヴィネスクは，西側諸国においてもゴマの活動を広く紹介するとともに，ルーマニアの文化統制について報告する必要性を強調している(9)。4 月 15 日の放送では，スターリン主義の文化統制を批判しているはずのルーマニアにおいて，イオン・ヴィアヌらゴマの支持者に対する厳しい弾圧が依然として継続されていることが報告されている(10)。5 月 10 日には，ゴマの逮捕に対する抗議運動が各地で行なわれたことが報告される(11)。ブルトゥス・コステ（Brutus Coste 戦後，ルーマニア人亡命者の組織化を率先した人物。エリアーデが亡命者組織を設立する際にも最大の協力者となった）が代表でありニューヨークに本部を置く人権に関する国際協会，さらに各地の大学ではミルチア・エリアーデ，ジェオルジェ・パラデ，マテイ・カリネスク，トーマ・パーヴェルなどが抗議運動の中心になったという。パリのフランス作家協会は，ゴマに入会を勧め，創作の場所を提供することを申し出た。さらに，ウージェーネ・イオネスコらが代表を務めた「ルーマニアの人権を守るためのフランス委員会」（Comitetul Francez pentru Apărarea Drepturilor Omului în România）は，およそ 600 の署名を集めてゴマの解放を訴えた。そのほか，ゴマの解放やルーマニアの文化統制に抗議するデモがいくつも行なわれたと報告されている。

フランスやアメリカを中心とするこれらの抗議運動が展開するなか，ゴマは釈放され，彼を亡命させようとする支援活動が行なわれるようになった。さらにゴマの逮捕を契機として生じた反体制運動は，ルーマニアだけでなく東欧諸国の社会主義政権に対する反体制運動として展開していった。7 月 1 日の放送では，ジスカール＝デスタンとブレジネフの会談に抗議する集会において，ミシェル・フーコーやロラン・バルト，アントワーヌ・ブルセイエ，ジャン＝ポール・サルトル，レオン・シュヴァルツなどのフランスの知識人たちがゴマの亡命を支持するために発表した文章が報告された。ロヴィネスクはロラン・バルトの以下の言葉を伝えている。

> 東欧から逃れてくることのできた知識人たちが，今晩，フランスの知識人たちと同席していることをまことに嬉しく思います。彼・彼女らのあいだには，一致するものが存在します。それは，知識人の深遠な職務であり，いかなる状況にあろうと，思想の自由のために発言し戦うということです。東欧諸国のほかの知識人たちもフランスのわれわれのもとに来ることができるように切望しています。わたしはとりわけポール・ゴマのことを考えています。ルーマニアはよく知っている国であり，愛している国なのです。(12)

ゴマとその家族は，1977 年 11 月 20 日にフランスへ亡命することに成功する(13)。ゴマの反体制運動をめぐるこれらの放送は，30 年間続いた放送内容の一部にすぎない。しかしゴマの反体制運動は，チャウシェスク体制下におけるもっとも大規模な反体制運動のひとつであり，それに関するロヴィネスクの放送内容は国家や政党の統制を脱した文化創作の場所を確保しなければな

らないという彼女の見解を明示している。

一方ロヴィネスクは，反体制運動を展開するこのようなラジオ放送において，エリアーデの言葉や作品についてしばしば言及していた。次節では，エリアーデに関する放送内容に着目することで，エリアーデの宗教学が亡命者によってどのように受容されていたのかを明確化したい。

３．ロヴィネスクが語ったエリアーデの宗教学

ロヴィネスクとエリアーデの交遊(14)がはじまったのは，戦後，ロヴィネスクがフランスに亡命してからである。ロヴィネスクの自伝にはつぎのように記されている。「エリアーデとシオランは，ルーマニアにいるときから知っていたと思えるほどに親しい存在となった。とりわけエリアーデとは最初から，（もちろん文化的な）バリケード〔異国でルーマニア文化を守ろうとする意思〕を共有していると感じた。夫ヴィルジル〔イエルンカ〕と〔エリアーデ夫人の〕クリスティネルとともに旅行したあとには，とりわけそのように感じた」(15)。ロヴィネスクが記しているように，ふたりは亡命生活の当初から，ルーマニア人としての文化創作を中心に据えた反体制運動を緊密に協力しながら展開した。エリアーデが日記や自伝でロヴィネスクの名前に言及することはそれほど多くない(16)。しかしそれは，亡命者としての政治活動というエリアーデが公の場で語ることの少なかった領域において，あまりに親しい間柄にあったことが理由であると思われる。日記における数少ない記述箇所のひとつには，つぎのように記されている。「1977 年 11 月 28 日，モニカ・L が自宅の玄関前で襲撃を受け，激しく暴行されたことを聞いた。クリスティネルが，数時間前に病院から戻ったばかりの彼女と電話で話した。頭部への損傷がなかったことは，彼女にとって非常な幸運であった。この襲撃は，ポール・ゴマやルーマニアの反体制派が巻き込まれた「スキャンダル」に続く脅迫のひとつである。襲撃はゴマがパリに到着する前日に起こったのである」(17)。ロヴィネスクとエリアーデは，異国でルーマニア人として生き，創作活動を行なう過程において，理解しあえる協力者として互いを意識していたと考えられる。

ロヴィネスクは 1982 年 3 月 5 日の放送(18)において，75 歳になったエリアーデを祝福し，亡命者組織の設立と運営においてエリアーデがきわめて重要な役割を果たしてきたと述べている。ロヴィネスクがとりわけ高く評価しているのは，エリアーデが『明星（*Luceafărul*）』をはじめとする亡命者向けの機関誌を創刊し，社会主義体制の文化統制に抗する創作活動を亡命者に呼びかけ続けたことである。ロヴィネスクは『明星』の創刊号（1948 年）に掲載されたエリアーデの以下の言葉を改めて伝えている。

> 現在の歴史的契機は，世界と存在に関するグローバルな体験と理解を高く評価し，さらにそれらを必要としていると言える。生産的な体験と理解は，ディアスポラのうちで実現される。なぜならば，ソヴィエトによって占領された諸国においては，いかなる創作も不可能であり，そのような創作はそれが禁止されていない場所で行なう必要があるからである。さらに未来の世界は，普遍性のある理念と体験に関する具体的表現，歴史的表現を見つけ出そうとすることによって生じるからである。そのような普遍性をもった理念と体験は，パウロともっとも深遠なユダヤ神秘主義の潮流などのユダヤ人のディアスポラの時代からそうであったよ

うに，故郷にとどまったままの人間よりも，移住した人間の方が接近しやすい。それゆえに移住した人間は，ルーマニアの現状から離れてなどまったくいない。その者たちは苦難に満ちた疎外を乗り越え，みずからの体験が有する歴史的役割と精神的重要性を自覚しなければならない。彼らの体験は風変わりなものなどではなく，それどころか，民族の運命とルーマニアの文化，さらにヨーロッパの運命と精神にとって決定的な啓示となるであろう。ソヴィエトによって占領された国において精神の自由に対する信念を表明するためには，みずからの自由を犠牲にするほかない。レジスタンスとプロテストによってかの地〔ルーマニア〕で示される精神性に対しては，ここディアスポラのあいだで，積極的に人間の自由と価値ある人格を実現しようとする精神性，すなわち普遍的な型を有した精神性によって応じなければならない。(19)

この引用文に続き，ロヴィネスクは以下のように述べている。「エリアーデは，当時パリに亡命していたルーマニア知識人たちをこのような理念のもとで団結させることを試みたのである」(20)。ロヴィネスクによれば，エリアーデは実際に「知識人の抵抗力の中心点（punctul focal al rezistenței intelectuale）」となり，反体制運動において中心的役割を担った。たとえばエリアーデは，亡命知識人たちの創作の場所を確保するために，ルーマニア学術協会（Societății Academice Române）とその機関誌『ルーマニア作家雑誌（*Revista Scriitorilor Români*）』の創設と創刊に尽力するほか，ヴィルジル・イエルンカがパリで刊行していた『郷愁の覚書（*Caiete de Dor*）』や亡命雑誌『境界（*Limite*）』などに数多く寄稿した。さらに，既述のゴマ逮捕に対する抗議運動やジェオルジェ・カルチウ（Gheorghe Calciu）〔ルーマニア正教会の聖職者。鉄衛団運動に関与した疑いにより Piteşti の監獄に収容されていた〕の解放運動に積極的に参加した。それらの活動を通してエリアーデは，亡命者に「文化創作の場所と自由の場所（spațiu de cultură şi de libertate）」を提示しようとしたという(21)。ロヴィネスクはこのような自由を求めるエリアーデの行動の理念を適切に表現する言葉として，エリアーデが『明星』の第二号（1949 年 5 月）に掲載したつぎの言葉を引用している。

人間にとって自由とは，歴史的契機，時代に抗することによって実現される。すなわち，特定の歴史的状況に身を置くことは，その状況に沿う行動をとるように仕向け，その行為者を常に制約し，ついには操り人形のようにしてしまう。そのような時代に抗することによってのみ自由は実現されるのである。(22)

歴史的制約に徹底的に抗うことで実現される人間のあり方とは，エリアーデが宗教学で主題とした宗教的人間のあり方と重なるものと考えられる。ロヴィネスクも，エリアーデの宗教学における，現代世界における宗教的人間のあり方に特に関心を示している。ガリマール社から刊行された『聖と俗（*Le Sacré et le Profane*）』について紹介した 1965 年 4 月 28 日の放送内容(23)を読解することによって，エリアーデの宗教学に対するロヴィネスクの着目点を確認したい。

ロヴィネスクは，ルーマニア時代から本書刊行に至るまでのエリアーデの活動について，未知

なる文化形態を紹介することにより，偏狭性を打破した普遍的文化の創出に努めてきたとまとめている。亡命後は，ルーマニアを含む東方の諸文化に西欧の目を向けさせるために，この方向性をさらに徹底していくことになったという。『聖と俗』は，このような目的に沿って，アルカイックな人間の宗教的行動と近代人の行動を比較し，前者の後者における残存を主題にしている。ロヴィネスクは宗教的人間の特徴について，超越的なものと不断に接触しなければ生きることができない人間のあり方としてつぎのようにまとめている。

> 宗教的人間に関して，エリアーデは以前から彼のあらゆる著書において述べてきたが，本書でも改めて取り上げ，以下のように定義している。すなわち，宗教的人間は超越的なるものと不断に接触することがなければ生きていくことが不可能である。宗教的人間にとって唯一実在的であるものは聖性であり，存在論的本性によって宗教的人間は聖性に飢えているため，あらゆるものを聖化する。まず最初に聖化するのは，場所と時間である。(24)

宗教的人間は不可逆的時間から自由になるために，聖なるものとの接触を継続しようとする。近代的人間は自由を得るために神を殺し，聖なるものを縮小して俗なるものを拡大することを試みてきた。しかし聖なるものに対する希求は，近代的人間の行動や思想のうちにも残存している。近代社会における聖のあり方に関するこのエリアーデの議論は，聖なるものの残存・偽装（Survival, Camouflage）と呼ばれ，『聖と俗』では最終節「近代社会における聖と俗」において詳述されている。エリアーデによれば，宗教的人間は人間や世界が神々によって創造され，諸文化が神話的英雄によって創設されたと見なすことにより，人間存在が聖なるものに由来し，それによって維持されていると考える。一方，近代的人間は，自己をただ歴史の主体・動因とのみ認識し，超越的存在との接触や断絶を意識することはない。しかし非宗教的な近代的人間は，宗教的人間の末裔であるため，その行動から宗教的要素が完全になくなることはないという。エリアーデはつぎのように説明している。「しかしながらすでに述べたとおり，完全に非宗教的な人間は，もっとも強度に非聖化された近代社会においてすら稀な現象である。大抵の「宗教を失った」人間は，たとえ意識しなくとも，依然として宗教的に振る舞っている。われわれはここで近代的人間の，一様に宗教的呪術的な構造と由来をもつおびただしい「迷信」と「タブー」のことだけをいっているのではない。みずから非宗教的であると感じ，かつ自称する近代的人間も依然として偽装した神話や堕落した儀礼をふんだんに用いている。たとえば既述のように，新年の行事や新築祝いは，世俗化しているが依然として更新儀礼の構造を有している。同じことが結婚，子どもの誕生，就任，あるいは昇進の際の祝いや催し事についても言える」(25)。エリアーデは聖の残存・偽装についてこのように説明し，演劇や小説，映画，マルクス主義，精神分析における聖なる構造を示している。

ロヴィネスクは，聖なるものの残存・偽装について，マルクス主義とフロイトの精神分析に関するエリアーデの分析を紹介している。聖の残存・偽装に関するエリアーデの議論に深く立ち入ることはしない。本稿ではロヴィネスクが，聖の残存・偽装に関する議論を，エリアーデの作品の中核と見なしていることを確認するのみにとどめる。ロヴィネスクは聖の残存・偽装を紹介し

たあとで，以下のように述べて放送を締めくくっている。

> 結論において，ミルチア・エリアーデは人間の第二の堕落について言及している。E・M・シオランも，彼の最新の著書において，時間のうちへの最初の堕落のあとに生じた，時間のうちからの第二の堕落について言及している，より正確には，心を奪われている。ミルチア・エリアーデは楽園からのアダムの追放を想起しながら，以下のように記している。「第一の堕落のあと，宗教性・宗教心〔religiozitate, Religiosität〕は悩める意識の地平にまで達した。第二の堕落のあと，宗教性・宗教心はさらに深く沈んで無意識の深淵に降った。いまやそれは忘れられたものとなっている」。ミルチア・エリアーデの作品は，学術的なものであれ文学的なものであれすべて，現代人の唯一の問題というわけではないが深刻な問題であるこのような忘却に抗する論告であるといえる。(26)

ここでエリアーデの言う宗教性・宗教心とは，聖性を認識する力を意味すると考えられる。既述のように近現代社会では，聖なるものはきわめて認識されにくい形式をとっている。しかし近代的人間は聖を認識する能力を喪失したのではなく，ただ忘却しているだけである。ロヴィネスクによるエリアーデの引用個所のまえには「ある観点からすれば，みずから非宗教的と称する近代的人間にあっては，宗教と神話は彼らの無意識の闇のなかに隠れているといっても過言ではなかろう――それは近代的人間がその内奥深く，生の宗教的経験を回復する可能性を有していることを意味する」(27)と記してある。『聖と俗』の最終部は，このような主張に関する，キリスト教の言葉を用いた言い換えであると言える。

このようなロヴィネスクの解釈の妥当性を問うことが本稿の目的ではない。不可逆的時間に抗する聖性を見出す手段を現代人に提示しようとする試みは，既述のロヴィネスクによって引用された「人間にとって自由とは，歴史的契機，時代に抗することによって実現される。すなわち，特定の歴史的状況に身を置くことは，その状況に沿う行動をとるように仕向け，その行為者を常に制約し，ついには操り人形のようにしてしまう。そのような時代に抗することによってのみ自由は実現されるのである」というエリアーデの文章における歴史的制約から自由になることを求める試みと重なるものと言えよう。そしてロヴィネスクは，歴史的制約から自由になることを求めるエリアーデの言葉を，社会主義体制の文化統制から自由になろうとする反体制運動の理念と見なしていた。ロヴィネスクはエリアーデの宗教学を，反体制運動の理念として読み替えていたと言える。一方，亡命者としてロヴィネスクときわめて近い場所にいたエリアーデも，自身の宗教学がロヴィネスクによって読み替えられることを想定していた可能性が考えられる。

４．ルーマニア人亡命者を読み手としたエリアーデ宗教学

近現代社会には聖なるものが偽装したかたちで残存しており，近代的人間はそれを認識する手段を得なければならないというエリアーデの主張は，今日の宗教学において，論拠に乏しい非学問的な言葉と見なされる傾向にある。聖の残存に関するエリアーデの議論は，宗教の本質を成す聖性は政治的文脈の影響を被ることなく存続するという主張に基づく。宗教の本質を政治的文脈

から切り離して語ることは，その語り手の立場をも政治的文脈を超えた場所に置くことになるゆえに，厳しい批判の対象となっている(28)。

確かに，近年の宗教概念論において批判されたように，エリアーデの宗教概念は，政治的文脈から切り離された，西洋中心主義，本質主義的なものであり，超越的認識欲求を有する側面をもつ。しかしエリアーデとロヴィネスクの関係性を踏まえると，エリアーデは自身の超歴史的な定義を付した宗教概念がロヴィネスクによって亡命者に向けた言葉として語りなおされ，社会主義政権という権力に対する抵抗の言葉として機能することを想定していたと考えられる。エリアーデの宗教概念は，異国で語る場所を喪失していた亡命者たちに語る場所を提供し，さらに権力への抵抗の手段となる言葉として語りなおされた。その言葉は，「西洋」のうちにおける移動性をめぐるものであり，西側で語られるヨーロッパのあり方に対して異なるヨーロッパ像を示すものとして，亡命者のあいだで機能したと考えられる。エリアーデとロヴィネスクの言葉がルーマニア人亡命者のあいだにどの程度浸透していたのかについてはさらなる資料調査が必要である。しかしエリアーデの言葉がその言葉を受容した他者との関係性においてどのように機能していたのかを明確にする作業は，これからのエリアーデ研究において不可欠なものとなろう。さらにその作業を継続することは，宗教概念と宗教学が語られてきた政治的文脈を明らかにすることに資すると思われる。

＊本稿は，宗教倫理学会第 14 回学術大会での研究報告「戦後フランスにおけるルーマニア人亡命者の活動と宗教学」に基づいている。
＊本稿は，平成 25 年度日本学術振興会特別研究員研究奨励費による研究成果の一部である。

参考文献

Ecaterina Bălăcioiu-Lovinescu, *Scrisori către Monica, 1947-1951*, Bucureşti, Humanitas, 2012.

Ioan Petru Culianu, *Omul şi opera*, Iaşi, Polirom, 2003.

Mihnea Berindei, Dorin Dobrincu, Armand Goşu [ed.], *Istoria comunismului din România: documente. Perioda Gheorge Gheorghiu-Dej, 1945-1965*, Bucureşti, Humanitas, 2009.

———, *Istoria comunismului din România: documente, Perioda Nicolae Ceauşescu 1965-1971*, Iaşi, Polirom, 2012.

Mircea Eliade, *Autobiography, Volume Ⅱ, 1937-60, Exile's Odyssey*, Chicago and London, The University of Chicago Press, 1988. 石井忠厚訳『エリアーデ回想（下）』未来社，1990 年。

———, *Journal Ⅲ, 1970-1978*, Chicago and London, The university of Chicago Press, 1989.

———, *Împotriva Deznădejdii: Publicistica exilului*, Bucureşti, Humanitas, 1992.

———, *Das Heilige und das Profane, Vom Wesen des Religiösen*, Insel Verlag Frankfurt am Main, 1984. 風間敏夫訳『聖と俗』法政大学出版局，1998 年。

Mircea Handoca, *Mircea Eliade şi contemporanii săi*, Bucureşti, Editura Lider, 2009.

Monica Lovinescu, *Unde Scurte, I - VI*, Bucureşti, Humanitas, 1990-1996.

———, *Întrevederi cu Mircea Eliade, Eugen Ionescu, Ştefan Lupaşcu, şi Grigore Cugler*, Bucureşti, Cartea Românească, 1992.

———, *Jurnal, 1981-1984,* Bucureşti, Humanitas, 2002.

———, *Etica neuitării*, Bucureşti, Humanitas, 2008.

———, *Diagonale*, Bucureşti, Humanitas, 2010.

———, *Jurnal essential*, Bucureşti, Humanitas, 2010.

———, *La Apa Vavilonului*, Bucureşti, Humanitas, 2010.

Paul Goma, *Jurnal, De căldură-mare, I -III*, Bucureşti, Nemira, 1996.

———, *Scrisuri I , 1971-1989, Bio-Bibliografie, interviuri, dialoguri, articole*, Bucureşti, Curtea Veche Publishing, 2010.

Virgil Ierunca, *Trecut-au anii: Fragmente de jurnal, Întîmpinări şi accente, scrisori nepierdute*, Bucureşti, Humanitas, 2000.

磯前順一『宗教概念あるいは宗教学の死』東京大学出版会，2012 年。

註

(1) 反体制運動を行なったことで知られるルーマニア人作家のポール・ゴマは，体制派の聖職者が亡命者を装い，国外の亡命者組織の内部に潜入し，情報収集を行なっていたことを西ドイツのラジオ放送で報告している。共産党と正教会のこのような関係性に対する評価はさまざまであるが，ゴマによると，ユスティニアン・マリナは共産主義体制下において政党に協力しつつも正教会が生き残る道を模索したという。しかし，ユスティニアン・マリナを継いで総主教の地位に就いたユスティン・モイセスク（Iustin Moisescu，在任期間 1977 - 86 年）については，プロパガンダの道具として共産党に利用されるばかりであったと厳しく批判している（Paul Goma, *Scrisuri I , 1971-1989, Bio-Bibliografie, interviuri, dialoguri, articole*, Bucureşti, Curtea Veche Publishing, 2010, pp. 522-527）。

(2) 奥山史亮『エリアーデの思想と亡命――クリアーヌとの関係において』北海道大学出版会，2012 年においては，亡命者組織の機関誌に掲載されたエリアーデの論説を整理し，亡命者としてのエリアーデの政治的見解を明確化する作業を行なった。それに対して本稿では，エリアーデの政治的見解をほかの亡命者がどのように評価したのかという，エリアーデの受容の問題に取り組む。

(3) モニカ・ロヴィネスクの自伝である Monica Livinescu, *La Apa Vavilonului*, Bucureşti, Humanitas, 2010 を参照。

(4) Ecaterina Bălăcioiu-Lovinescu, *Scrisori către Monica, 1947-1951*, Bucureşti, Humanitas, 2012 には，エカテリナが亡命した娘に送った書簡が収録されている。エカテリナの逮捕や投

獄に関しては，共産党，保安警察の文書を収録した Mihnea Berindei, Dorin Dobrincu, Armand Goşu [ed.], *Istoria comunismului din România: documentte. Perioda Gheorge Gheorghiu-Dej, 1945-1965*, Bucureşti, Humanitas, 2009 によって知ることができる。

(5) チャウシェスクは 1971 年 7 月 6 日に，マルクス・レーニン主義とルーマニアのナショナリズムを統合した新たな社会を実現するための政策を共産党の理事委員会で発表した。その政策では，文化や教育，マスメディアに対する共産党の統制が強められ，プロパガンダに沿った創作や報道を行なうことが求められた。具体的な政策の内容は同年 7 月 7 日から共産党の日刊紙『閃光』に連載されたため，「7 月テーゼ」と呼ばれる。

(6) Monica Lovinescu, *Unde Scurte Ⅲ*, Bucureşti, Humanitas, 1994, pp. 168-169.

(7) Paul Goma, *Scrisuri Ⅰ, 1971-1989, Bio-Bibliografie, interviuri, dialoguri, articole*, Bucureşti, Curtea Veche Publishing, 2010, pp. 128-130.

(8) Monica Lovinescu, *Unde Scurte, Ⅱ*, Bucreşti, Humanitas, 1993, pp. 200-202.

(9) *Ibid.*, pp. 202-205.

(10) *Ibid.*, pp. 205-207.

(11) *Ibid.*, pp. 210-213.

(12) *Ibid.*, p. 227.

(13) ヨアン・ペトル・クリアーヌも，フロニンゲン大学に勤務していた時期にゴマと会談し，彼の反体制運動を高く評価していた。そしてゴマの運動を西欧社会に広く知らしめるために，ジャーナリストを紹介してくれるように友人であったイタリア人研究者ジャンパオロ・ロマナート（Gianpaolo Romanato）に依頼していた。Ioan Petru Culianu, *Omul şi opera*, Iaşi, Polirom, 2003, pp. 147-149 における，1982 年 10 月 31 日，1983 年 5 月 8 日付のロマナート宛ての手紙を参照。

(14) ロヴィネスクとエリアーデの交遊を紹介したものに，Mircea Handoca, *Mircea Eliade şi contemporanii săi*, Bucureşti, Editura Lider, 2009 がある。

(15) Monica Lovinescu, *La Apa Vavilonului*, Bucureşti, Humanitas, 2010, p. 106.

(16) 自伝には，ロヴィネスクとの出会いについてつぎのように記されている。「わたしたちは少し前に友人を得た。モニカ・ロヴィネスクとヴィルジル・イエルンカである。モニカは文学と演劇に情熱を燃やし（彼女はウージェーネ・イオネスコの戯曲の成功に貢献した），ヴィルジルはルーマニア人亡命者の文化活動に熱心で率先して行動し疲れることを知らなかった。みなが大変喜んだことに，そしてそれに劣らず大変驚いたことに，モニカとヴィルジルは翌春に結婚した」（Mircea Eliade, *Autobiography, Volume Ⅱ, 1937-60, Exile's Odyssey*, Chicago and London, The University of Chicago Press, 1988, p. 150. 石井忠厚訳『エリアーデ回想（下）』未来社，1990 年，148 頁）。

(17) Mircea Eliade, *Journal Ⅲ, 1970-1978*, Chicago and London, The University of Chicago Press, 1989, p. 285.

(18) Monica Lovinescu, *Unde Scurte Ⅲ*, Bucureşti, Humanitas, 1994, pp. 275-280.

(19) *Ibid.*, pp. 277-278.

(20) *Ibid.*, p. 278.

(21) *Ibid.*, p. 279.

(22) *Ibid.*

(23) Monica Lovinescu, *Unde Scurte Ⅰ*, Bucureşti, Humanitas, 1990, pp. 158-163.

(24) *Ibid.*, p. 160.

(25) Mircea Eliade, *Das Heilige und das Profane, Vom Wesen des Religiösen*, Insel Verlag Frankfurt am Main, 1984, pp. 176-177. 風間敏夫訳『聖と俗』法政大学出版局，1998 年，195 頁。

(26) Monica Lovinescu, *Unde Scurte I*, p. 163.

(27) Mircea Eliade, 1984, p. 182. 『聖と俗』203 頁。

(28) 近年の研究には，磯前順一『宗教概念あるいは宗教学の死』東京大学出版会，2012 年などがある。

Eliade's Concept of Religion as informed by Monica Lovinescu's Resistance against the Communist Regimes in Romania and the Soviet Union

Fumiaki OKUYAMA

Both the foundation and collapse of the Soviet Union produced dramatic changes in socio-political conditions. In the aftermath of the collapse, many emigrated from the former Soviet bloc to Western countries. These migrants propagated eastern cultures all over Western countries and as a result cultural clashes between immigrations and the people of the host countries ensued, often leading to economic discrimination and disparity. These issues remain alive today. The topic of immigration has been a subject of study for years in the field of the History of Religions. Above all, Mircea Eliade, who lived in exile in France, actively worked for the resolution of immigration problems and expressed opposition to the Romanian Communist regime. Monica Lovinescu, who was a leading advocate for Romanian exiles as well as a radio anchor for exiles, cooperated with Eliade in carrying out protest campaigns against the Romanian and Soviet Communist regimes. It has been considered that Eliade's concept of religion was a key factor in the resistance against these regimes.

This paper focuses on Lovinescu's text such as *Unde Scurte*, *Bucureşti*, and *Humanitas*. I elucidate what Eliade calls religion and argue that he understood religion as something that was contrary to the propaganda of the Communist regime due to its intertwinement with the Romanian national resistance.